

受賞紹介 記憶モデルによる敬語意識の変化予測

著者	横山 詔一, 朝日 祥之
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
号	6
ページ	39-42
発行年	2011-10
URL	http://doi.org/10.15084/00000684

〈受賞紹介〉

社会言語学会は、学会誌『社会言語科学』に掲載された論文の中から特に優れた論文に対し、「徳川宗賢賞」を授与しています。横山氏、朝日氏、及び真田氏の論文は、従来の言語研究で本格的に議論されてこなかった「変化の将来」という領域を開拓した点が高く評価され、2009年度の「徳川宗賢賞・優秀賞」を受賞しました。

受賞論文 横山詔一・朝日祥之・真田治子 (2008) 「記憶モデルによる敬語意識の変化予測」
『社会言語科学』11(1): 64–75.

記憶モデルによる敬語意識の変化予測

横山 詔一^a, 朝日 祥之^b

^a 国立国語研究所 理論・構造研究系 教授

^b 国立国語研究所 時空間変異研究系 准教授

1. はじめに

ここでは、『社会言語科学』第11巻第1号(2008年8月発行)に掲載された、上記の論文を紹介する。この論文の主眼は、2008年11月に実施された第3次「岡崎調査」の結果の一部を、2007年の時点であらかじめ予測することにあつた。岡崎調査とは、愛知県岡崎市を定点観測フィールドとして約50年間にわたって国立国語研究所が経年的に3回実施した大規模な「敬語と敬語意識の調査」を指す。第1次は1953年(昭和28年)、第2次は1972年(昭和47年)、そして第3次は先に述べたように2008年(平成20年)に実施された。

第3次岡崎調査は、予備調査の一環として、2006年にインターネットを利用した調査(以下、Web調査あるいはネット調査という)を実施した。そのデータも示し、上記の予測と突き合わせてみた。Web調査は研究者が現地でおこなう面接調査に比べてデータの質が劣ると評されることが多いものの、Web調査の弱点に十分注意して適切な調査設計をほどこせば、面接調査のシミュレーション(模擬実験)に耐えうるものとなるだろうと考えたからである。

2. 記憶理論の導入

人間の言語形成期は10歳前後だと言われる。この時期に獲得された言語意識や言語記憶痕跡がそれ以降の人生でもあまり変化しないで脳内に保持されるのであれば、第1次調査から20年程度の時間が経過した後に実施された第2次調査でも、同じ生年の人は第1次調査とほぼ同じ回答傾向を示すはずである。しかし、社会言語学の経年調査では、そうならないケースも少なからず確認されており、岡崎市の身内敬語意識は、その典型例だと言える。これは実際の時間の流れを追跡した大規模ランダムサンプリング調査によってのみ観測可能な事実であり、きわめて意義深い。

従来の言語調査では、大規模な経年調査が難しいということもあり、調査時の調査対象者の世代が要因として重視される傾向にあった。これは調査対象者の世代からその生年が客観的な時系列データとして算出でき、1回の共時的調査から、過去の言語使用の姿をいわば通時的に得られるのではないかという立場に立ったものである。

では、生年が同じでも、調査年が違くと回答傾向に差が生じるケースがこれまでの研究で散見されるのは、いかなる理由によるのであろうか。その説明をするために、心理学の記憶理論を導入する必要があると考えた。記憶には、意味記憶とエピソード記憶、短期記憶と長期記憶、顕在記憶と潜在記憶、宣言的知識と手続き的知識など、さまざまな区分・種類がある(横山・渡邊 2007)。この論文は、言語変化の経年調査データに対して記憶の側面からアプローチする手法の開拓を試みた。

記憶理論に立脚した新たなモデルを図1に示す。その骨子は次の通りである。

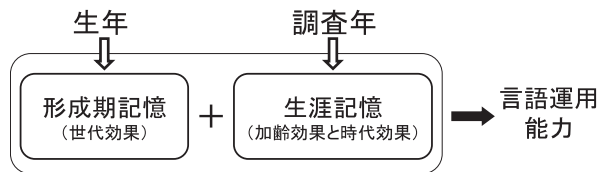


図1 記憶モデルの枠組み

- (1) 言語形成期に獲得された敬語意識は、記憶内に安

定した痕跡を残し、終生保持されると考える。これを「形成期記憶」という。形成期記憶は生年と深い関係がある。生年によって言語形成期にどの時代の社会を経験するのかが決まる。1960年代に生まれた人は、1970年代の経済高度成長時代に言語形成期を過ごしたことになる。その人が10歳前後に過ごした環境が、あるいは、その時代の言語の状況が形成期記憶に影響を残すと考えられる。

- (2) 調査年は言語形成期以降に過ごした生涯の長さに関係がある。1965年生まれの人が1990年に調査を受けたとすると、その時の年齢は25歳である。調査年が2010年であれば、年齢は45歳になる。言語形成期が10歳前後だとすると、調査時の年齢から約10歳を引けば、言語形成期以降に過ごした生涯の長さが求まる。このように調査年は加齢効果に関係する。そのほか、1953年調査と1972年調査では、たとえばテレビ普及率に格段の差があった。これは時代効果に関する典型的な要因である。加齢効果にかかわる記憶痕跡と、時代効果に関係する記憶痕跡の両者をあわせたものを「生涯記憶」とよぶならば、調査年は生涯記憶に相関する変数だと見なしてよい。

このように、本研究は人間の敬語意識を支える記憶に2種類のあるものと仮定した。そして、敬語意識の判断は、形成期記憶の強度と、生涯記憶の強度にもとづいておこなわれるとし、その選択の様相はこの2つの説明要因からなる多変量S字カーブによって決定されると考え、ロジスティック回帰分析によって第3次調査の結果を予測した。

3. 身内敬語意識の予測結果

調査項目は第1次調査報告書（国立国語研究所 1957）の198ページに掲出されている項目を使用した。すなわち「207家の中でも、年上の人や目上の人には敬語を使わなければならないでしょうか。それとも家の中では使わなくてもいいでしょうか」という質問であった。選択肢は「使うべきだ／時や場所や相手による／使わなくてもいい／不明」であった。第2次調査でも同じ項目が使用された（第2次報告書117ページ：国立国語研究所1983）。

先に示した図1のモデルにもとづいて得た第1次（1953年）と2次調査（1972年）の予測値を図2に示す。この図の縦軸は身内敬語に賛成（使うべきだ）の割合・確率である。実測値は●印で、予測値は○印で表した。この2回の調査は、予測値が実測値によく適合し、解析結果は良好である。

さらに、2006年に行ったネット調査（Web調査）の結果を図2に□印で示す。これも予測値とよく適合している。生年が1991年の層（10歳代）の身内敬語に対

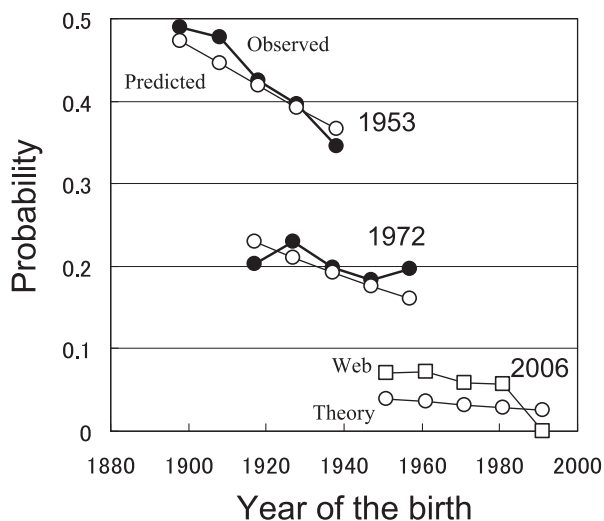


図2 身内敬語意識の多変量S字カーブによる解析

する肯定的回答の割合はゼロとなっているが、この層のサンプル数は12しかなく、きわめて少なかったため、測定誤差によって真値をとらえきれなかったと考えられる。

4. 敬語や共通語化の経年調査に向けて

日本語の語彙では、漢語・和語・外来語の対立や、方言・共通語の語形選択が、語感や使用場面と密接なかかわりを持っており、英語などよりも位相論的な性格が色濃く見られる。たとえば「身内敬語を使うべきか」というような使用場面とのかかわりにおいては、いわゆる「語用論的な経験」による判断も大きく働いているであろう。言語形成期以降になされる敬語習得の典型例は、大学生の就職活動に見られる。大学生は面接試験などで社会人集団と本格的に接触する経験を通じて、さらに高度で深い敬語知識を獲得していく。このような新たな社会集団との接触にもとづく経験から得た知識も、広く生涯記憶のなかに蓄積されていくと考えられる。

最後に、敬語と共通語化の関係に簡単にふれておく。岡崎市においては、時代が新しくなるにつれて「身内敬語は使うべきではない」という意識が社会全体で勢力を伸ばしていったと考えられる。調査対象者の生年が新しくなればなるほど、新しい時代に言語形成期を過

すことになり、身内敬語を使うべきではないという方向に形成期記憶は傾いていったのであろう。さらに、言語形成期以降も引き続き社会的な接触を通して「身内敬語は使うべきではない」という記憶痕跡が累積され、身内敬語の使用に否定的な方向の変化圧力が生涯年数に比例して増大していったように見える。そこには共通語化の影響もあったに違いない。

共通語化の過程については、井上（2000）が40年以上の期間にわたって経年的に研究を進めている。井上は国立国語研究所による山形県鶴岡市における3回にわたる共通語化の調査データ、およびその近郊櫛引町山添付近での井上自身による2回の調査データを綿密に分析し、共通語化の過程がS字カーブになることを実証した。言語変化のS字カーブについて、これほど大規模な研究は世界を見わたしても例がない。このような経年調査データを、本研究と同じ枠組みで分析し、有用な知見が導き出せるか否かを粘り強く吟味する努力が今後は求められるようになるだろう¹。

参 照 文 献

- 井上史雄（2000）『東北方言の変遷』東京：秋山書店。
国立国語研究所（1957）『敬語と敬語意識』、国立国語研究所報告11。東京：秀英出版。
国立国語研究所（1983）『敬語と敬語意識 岡崎における20年前との比較』、国立国語研究所報告77。東京：三省堂。
横山詔一・渡邊正孝（2007）『記憶・思考・脳』東京：新曜社。

横山 詔一（よこやま・しょういち）

国立国語研究所理論・構造研究系教授。博士（心理学）（筑波大学）。上越教育大学助手，国立国語研究所領域長，同研究所グループ長を経て，2009年10月より現職。

主な著書・論文：『表記と記憶』（心理学モノグラフNo.26，日本心理学会，1997），『記憶・思考・脳』（共著，新曜社，2007），「言語の生涯習得モデルによる共通語化予測」（共著，『日本語の研究』6(2)，2010），「記憶モデルによる敬語意識の変化予測」（共著，『社会言語科学』11，2008），A logistic regression model of variant preference in Japanese kanji: An integration of mere exposure effect and the generalized matching law. (with Yukiko Wada, *Glottometrics* 12, 2006).

受賞：日本教育工学会論文賞（日本教育工学会，1997）。

社会活動：社会言語学会理事，社会言語学会研究大会発表賞選考委員会委員長，計量国語学会理事，日本心理学会認定心理士認定委員会副委員長。

朝日 祥之（あさひ・よしゆき）

国立国語研究所時空間変異研究系准教授。博士（文学）（大阪大学）。国立国語研究所情報資料部門研究員，同研究開発部門研究員を経て，2009年10月より現職。

主な著書・論文：『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』（ひつじ書房，2008），『改訂版社会言語学図集 日本語・英語・中国語解説』（共編著，秋山書店，2010），'Cookbook method' and koine-formation: A case of the Karafuto dialect in Sakhalin. (*Dialectologia* 2, 2009), 「敬語研究と時間的言語変化研究との接点を求めて」（共著，『社会言語科学』11，2008），「海と方言一島の間の方言の伝播」（『日本語学』24，2005）。

社会活動：Methods international steering committee, ISDG (International Society for Dialectologists and Geolinguists) scientific committee, FEL (Foundation for Endangered Languages) executive committee, 日本語学会庶務委員，変異理論研究会世話人。

¹ ここで紹介したモデルは，すでに共通語化の予測にも使われており，たとえば，以下の論文が公刊されている。横山詔一・真田治子（2010）「言語の生涯習得モデルによる共通語化予測」『日本語の研究』6(2): 31-45。